

はじめに

2006年度、日本のうたごえは、九条をまもる平和のうたごえをひろげる「SINGING PEACE 999（スリーナイン）」行動を展開し、憲法公布60周年の日、11月3日から3日間“みんなが輝くあったか祭典”を合い言葉に、“憲法の心をうたう祭典”として“2006年日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸”（以下、“ふくい・北陸祭典”）を大きく成功させた。

一人ひとりが孤立させられている今の社会の中で、つながりあうことの大切さ、生きる力、命の大切さが語られている時、あらためて、祭典の“つながり”のステージ、「ぞうれっしゃがやってきた」、「ねがい」など、まさに、“子どもたちの笑顔と歌声があふれ、命が輝く祭典”となった。

この1年、日本のうたごえ祭典に向かって地方のうたごえ祭典、産業別のうたごえ祭典等の全国の連帯活動を展開した。サークル・合唱団の演奏活動の広がりを通して、つくり・うたい・広める創造豊かな運動、それらの活動をうたごえ新聞につなぎ、合唱発表会、協議会活動をはじめとする組織を大きくする活動を積極的にすすめてきた。

しかし、うたごえ創立60周年へ向かう運動の目標から見れば、新版歌集「うた・うた・うた always」を手に全国津々浦々で展開するうたごえ行動“SINGING PEACE 999”、加盟拡大、うたごえ新聞読者最高時めざすことなど、課題は残っている。

日本国憲法施行60周年の今年、憲法「改正」を明言する安倍首相のもと、人間の尊厳をうたい、平和をうたい、闘う人々を励まし、立ち上がる勇氣と心を結ぶ喜びを生み出すうたごえは、まさに出番だ。今総会では、06年の活動の成果をふまえ、「うたごえは平和の力」と音楽の輝きで人々を励まし勇氣づけていることに確信を持ち、憲法「改正」に国民過半数がNO！ の声をあげる状況をつくることも視野に入れた、創造豊かな運動を展開していくために、創立60周年に向かう計画と07年方針を決めたい。

私たちをとりまく社会の動き

憲法施行60年、2000万人のアジアの人々、300万人の日本国民の失われた命と焦土の中から生まれ、戦争のない平和で公正な世界を希求する憲法を手放すのか、まもり輝かせるのか、いまわたしたちは大きな歴史的な岐路に立たされている。

「5年をめどに改憲する」と宣言した安倍内閣が登場し、改憲を先取りする悪政が次から次へとおしよせている。

「やらせ」と「さくら」を使ってまで強行した教育基本法の改悪、海外派兵を正当化する自衛隊法改悪と防衛庁から防衛省への昇格、労働者を分断し、働く意欲をそぐ「成果主義賃金」や非正規雇用、「ホワイトカラー・エグゼンプション」など無制限のただ働きを

強いる労働法制の改悪、史上最高の利益を上げている大企業をさらに優遇し、庶民からは搾り取れるだけ搾り取る税制改悪、公務員攻撃と共にすすめられる利用者無視の「民営化」、「核兵器保有論」の浮上、国民の口を封じる共謀罪などなど、まさに、アメリカと財界のいいなりの国づくり、「戦争できる国」への道をひた走っている。

この政治が生みだす利益最優先、弱肉強食の「格差社会」は、命を軽んじ、働く意欲、生きる意欲をそぎ落とすものとなっている。競争と差別化が持ち込まれた教育現場での「いじめ」、自殺の多発、働いても働いても生活保護基準にも達しない低賃金労働者（ワーキングプア）や「過労死」の急増、重大事故や欠陥製品の多発、金融犯罪や汚職腐敗の増加など、暗い話題のニュースがつきない。そういう中で、文化的な営みをする時間や環境が失われ、孤立した、刹那的で享乐的な文化が人々のところを覆っている。

一方で、このような悪政、社会の動きにたいし、それを許さないと多くの人が声を上げ、たたかいに立ち上がり、共同・連帯の輪は大きな広がりを見せている。

ブッシュ大統領が起こしたイラク戦争への批判は世界の世論となり、アメリカ国民は中間選挙でしっかり審判を下した。アメリカの裏庭と言われていた中南米では「新自由主義経済」による格差と貧困の社会から国民本位の社会への変革がとどまることのない勢いで進んでいる。アジアでも平和的枠組みの中での対話がすすみ、今や超大国といわれたアメリカの覇権主義は破綻している。教育基本法改悪反対の闘いは、「教育を守れ」「子どもたちを守れ」の一致点で組織や立場を越えた広範な人々の共同を広げ、無権利状態の労働者が組合を作り権利を勝ち取る闘いも進んでいる。「九条の会」は全国で5600を越え、党派を超えた国民運動に発展しつつある。

人間の連帯や、命の尊さ、戦争のおろかさを描く映画や音楽、小説が多くの人に支持されているのは、人間らしくいきたい、誇りを持って働きたい、戦争はいやだという思いを多くの国民がもっていることのあらわれでもある。広島の中学生たちの平和への思いから生みだされた歌「ねがい」が世界をつなぎ、日本中にひろがっている。うたごえ喫茶・酒場やうたう会につどう人々は年々増え、メディアも注目する状況が生まれている。

感性を揺り動かし、共感を広げ、連帯をつくりだす音楽・文化・芸術の役割はますます大きくなっている。「うたごえは平和の力」「うたはたたかいとともに」「うたごえは生きる力」をかかげ、60周年を迎える運動の真価を発揮し、「つくり」「ひろめ」「結ぶ」とりくみを意気高くすすめていくことが求められている。

2006年度 活動のまとめ

方針 1 人々のねがいと結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、“共に生きる町づくり・地域づくり”のうたごえを広げる。

〔演奏・普及活動〕

“SINGING PEACE 999”運動の展開

憲法を語り、うたい交わす「九条をまもる平和うたう会」運動を起こすことを普及活動の柱に据えて、九条と九九条にちなみ“SINGING PEACE 999”とネーミングし取り組んだ。

小さな規模でも、毎回会場を移し、うたごえ喫茶を開催し、気軽にうたい語り合う場としてつづけている交野うたう会、連続して街角コンサートを展開した広島合唱団、地域に出かけミニコンサートをとりくむ新日鉄八幡うたう会、会議や練習の前に駅頭で歌う宣伝行動を取り組む（千葉、大阪、東京など）など創意ある活動が全国で展開された。

憲法関連の集会での演奏やみんなでうたうリーダーとしての取り組みは、集約できたものだけでも、約500回、約20万人にのぼり、平和・憲法にちなんだ歌を普及している（28都道府県の集約）。新潟では2500人の県民大集会に200人の合唱隊を組織して演奏、集会参加者に大きな感動を呼んだ。静岡・三島では県内の音楽専門家、市民合唱団と共同して「悪魔の飽食」全国縦断コンサートを成功させた。サークル・合唱団の演奏会、平和コンサート、うたごえ祭典でも、「平和・憲法」をテーマに企画され、多くの専門家、音楽愛好家と共に取り組まれている。そのなかで新しい歌も数多く生まれている。

それぞれ、「 をうたう合唱団」のように、市民にも広く呼びかけ歌い手を組織し、3桁を超える演奏を実現しているところも少なくない。

「ねがい」はどこでもうたわれた

この普及運動の中で、「ねがい」「日本国憲法第九条」「わたしを褒めてください」「あの日の授業」「憲法九条五月晴れ」などが数多くうたわれている。

なかでも「ねがい」は、人々の気持ちにフィットした、うたやすいソングとして、意識的なとりくみもあり、大きな広がりを見せている。

自分たちのことばで5番の歌詞をつくる取り組みも大きくひろがり、現在登録されているものだけで620番を越えた。

原水爆禁止世界大会、日本母親大会、全国保育団体合同研究集会、教育研究全国集会などの全国的な集会でうたわれたのを始め、教育現場や市民合唱祭などでも取り上げられている。また、キム・ウォンジュン日本公演や、ナターシャ・グジーコンサートでも「ともに歌う合唱団」が組織され各地で演奏された。

出版された「世界をつなぐ歌『ねがい』」の本の普及と合わせ、さらに徹底して大きく広げていくために「ねがいプロジェクト」を立ち上げとりくみをすすめている。

「ぞうれっしゃがやってきた」 絵本初版30年、初演20年

合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」が創られて20年、愛知で国際交流コンサートを成功させたほか、各地で演奏会が開かれ、親子で一緒に平和を考える取り組みとなった。180人のチャーター機を仕立てて南京公演も実現、ふくい・北陸祭典での高校生の吹奏楽伴奏での全国合同成功など、「ぞう」の歴史に新たな1ページを加えた。

「音楽・九条の会」と「うたごえ九条の会」のとりくみ

05年9月に池辺晋一郎氏、日下部吉彦氏らが、「平和でこそ美しい音楽が花開きます」

と憲法九条を守る一点で音楽家の共同を呼びかけた「音楽・九条の会」は07年1月現在37人の呼びかけ人、3800人を超える賛同者を数えている。06年1月に大阪で発足後初のコンサートを成功させたのに続き、東京では6月、12月のいずれも9日にコンサートを開催、好評を博している。うたごえも事務局としてかわり、九条守る一致点での共同のとりくみの発展の力になっている。

協議会やサークル・合唱団にも九条の会がつくられ、学習、宣伝、署名、演奏活動も各地で行われた。大阪の「うたごえ九条の会」では、独自の宣伝・署名行動や21団体が参加したパレードなども行い、地域の九条の会との共同のとりくみにも積極的にかかわり、ニュースも発行し大きな広がりを見せている。茨城では九条の会と音楽家が共同で開催したピースコンサートにうたごえ協議会も全面的にかかわり成功の大きな力になっている。岐阜・音楽集団ひまわりの湯上芳美さんは県内ほとんどの九条の会に出かけ、演奏、企画にと活躍した。兵庫の「ピース・ミュージック・パワー・ムーブメント」など青年の表現要求を集めた取り組みも盛んになっている。さが・平和の旅へ合唱団では、県内の音楽家・音楽愛好家によびかけ平和コンサートを実現。奈良祭典実行委員会準備会ではCD「TRIBUTE ARTICLE 9～憲法のこころ～」を協議会加盟団体の演奏会の音源を元に作成、さまざまな機会に普及している。

要請されて演奏に行くだけでなく、企画・制作の段階から関わり、アーティストの紹介など取り組みの成功の力になっている例も多い。

改憲の動きが強まっている現在、できるところからすぐに「うたごえ九条の会」を立ち上げると共に、幅広い専門家や音楽愛好家との共同を視野にいれた「音楽・九条の会」を全国で立ち上げることが求められている。

核兵器廃絶・基地強化反対のとりくみとうたごえ

3・1ピキニデーでは文化企画にナターシャ・グジーさんを迎え、静岡のうたごえ中心に「青い地球を」「海に生きたあなたよ」他を演奏、グジーさんと一緒に「ねがい」をうたったフィナーレは参加者も巻き込み元気のでるものとなった。核兵器廃絶を訴え、全国をくまなく行進する国民平和大行進でも、東京での出発式では青年によるピースライブが開催され、行進ではサウンドカーも登場、参加者を励ました。うたごえなども企画しながらうたごえの途絶えない行進にと協議会で位置づけて取り組んでいる愛知、千葉などに学びたい。

原水爆禁止世界大会・広島では、広島原爆症認定集団訴訟の完全勝訴の地裁判決に参加者全員立ち上がったの歓声、うたごえも「いのちをかけて」「折り鶴」そして、ステージ一杯の若者と海外代表がうたう「ねがい」でしめくくった。長崎でも長崎のうたごえ中心に「その手の中に」「今この時代に」などを演奏、海外代表と会場も一緒に「We shall overcome」が歌い交わされた。文化の分科会では各地の核兵器廃絶・憲法まもれの取り組みの中で音楽・文化の果たしている役割が語られ、参加者の確信になっている。

原水爆禁止世界大会の参加者の約半数を占める10代から30代の若者たちは、ここで学びつながり、全国で平和を守る担い手として育っている。人類共通の目標で、まさに党

派を超え、思想信条の違いを乗り越えた取り組みとして進んでいる核兵器廃絶の運動を、うたごえとしても運動の柱のひとつとして取り組むことは重要である。

基地強化を許さない住民運動が各地で取り組まれている。岩国では国鉄広島ナッパーズの山上茂典さんを先頭にうたった「空の歌」「住民投票音頭」などのうたごえが、住民投票勝利の大きな力になり、12月に同地で開かれた日本平和大会の成功につながった。原子力空母母港化反対の横須賀での大集会にも首都圏のうたごえが結集し平和のうたをひびかせた。毎年行われている北海道矢白別平和盆踊りには合唱団アンラコロや北海道合唱団が歌って参加している。

働く者のたたかいとうたごえ

なりふり構わぬリストラ、労働者いじめが横行する中、闘いに立ち上がる多くの人々がいる。うたごえはここでも大きな力を発揮している。世界一の売り上げを誇るトヨタのお膝元で行われるトヨタ総行動にはトヨタ車体うたごえを先頭に愛知のうたごえが連帯、過労死裁判を闘う内野博子さんを励ます「おやすみ」や、「トヨタかぞえうた」「みんな元気か」などを演奏。NTTリストラ裁判を闘う群馬では「母さんの樹」の演奏会を、電通のうたごえと群馬のうたごえが共同して成功させた。JR採用差別と闘う国鉄のうたごえは、闘争勝利をめざす集会で「うれし涙」「俺たちの歌」「職場に帰る日を信じて」などをうたい、圧倒的な感動を生んだ。リストラの毒味役と公言するIBMを告発する大集会では南部合唱団とIBMの労働者が構成劇を披露、闘いを知らせるだけではなく、怒りと感動を生み出す力となった。大阪の私立初芝学園で学校改悪・教育つぶしを許さない闘いを支援する集会は、「人が人として生きる・李陽雨コンサート」して開かれ、合唱団Peace Call、友よ闘ってこそ明日がある合唱団、いずみ合唱団、合唱団ぐみの木なども加わり、たたかいと文化を結んだあたたかくて元気の出るものとなった。

教育基本法改悪反対のたたかいでは、教育のうたごえの仲間が先頭に立ち、多くの教員にも呼びかけ「子どもを守るうた」「自由の風」「あの日の授業」などを持って、たたかいを励まし共同を広げる大きな役割を果たした。

東京南部では、春闘やメーデーなどの取り組みでつながった労働組合との共同から、定例のうたごえ酒場が開催され、若い労働者も参加をするとりくみになっている。

職場のうたごえでは、高齢化や退職者の増加や働く環境の悪化から職場のサークル・合唱団の活動が困難になっているところも多い。その中で、郵便の職場で若い非正規雇用の労働者も結集、労働組合も全面的にバックアップして郵便祭典から全国祭典まで参加し、その後サークルの継続を決めた広島の「うたごえプロジェクト730」の取り組みは特筆される。おおいに学びながら、青年の雇用と労働条件改善を要求するたたかいなどにもさらにうたごえをとどけたい。

元気な女性のうたごえ

東京の女性のうたごえ連絡会は定期的にニュースも発行し、3・8国際女性デーでの演奏や、音楽・九条の会のコンサートなどにも出演、さまざまな集会での演奏にも積極的な役割を果たしている。大阪の女性のうたごえは、ふくい・北陸祭典の女性合同の事務局団体としてその成功に大きな役割を果たした。兵庫では毎年女性のうたごえ独自の合唱発表

交流会を開催している。協議会に加盟はしていない団体も含め幅広い共同のとりくみ、連帯活動が行われている。

盛況なうたう会、うたごえ喫茶・うたごえ酒場

みんなとカー杯うたいたいという要求は渦巻いている。恒常的に開催されているうたごえ喫茶も増え、参加者も確実に増えている。文化活動を積極的に取り入れ、うたごえ祭典の成功を運動方針に掲げる年金者組合では、各地でうたう機会がもたれ、定例化されたサークルも増えている。母親大会の分科会や昼休み企画などにうたごえは欠かせないものになっている。各地のアコーディオンサークルにも伴奏の依頼が増え、活動の場を広げている。要求に応えるシングアウトリーダー、伴奏者を大量に生みだすことが求められている。新版歌集「うた・うた・うた」とカラオケCDを有効に生かす取り組みや、広島のうたごえ協議会が開催した「うたう会・うたごえ喫茶のためのリーダー＆伴奏者＆サポーター・交流講座」の経験に学びたい。

さまざまな集会やメーデーなどで、マンネリを打ち破り、参加者が心をひとつに元気の出る文化的な要素が求められている。うたごえが演奏集団としてだけでなく、企画・制作・演出・進行などのプロデュース集団として力量を高めることが大切になっている。

〔創作活動〕

多くの人が“こぞってうたえる”愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

昨年の創作運動には大きな前進があった。全国で旺盛な創作活動が実践されたが、憲法や平和、教育などをテーマにしながら、生活感・リアリティのある作品が増え、また作品をよりよく演奏し届けようという意気込みにあふれた各地での取り組みが、日本のうたごえ祭典「オリジナルコンサート」(以下、オリコン)にも数多く反映され、会場を沸かせた。合唱組曲「おばあちゃんから孫たちへ」(東北のうたごえ)、「九条上総弁」(このゆびとまれ、総の国人)、「わたしたちは白い風～大阪府立病院機構労働組合のうた～」(大阪府庁うたごえ合唱団)、「平和の999」(大阪のうたごえ合同)、「空の歌」(山上茂典)、「9条で333」(九州のうたごえ創作合同)、「バナナってどんな味」(合唱団しじゅうから)、「その子2～いじめられてた子～」(道家桂)、「チャイナソング」(親と子のみどりの杜合唱団)など。

その背景には、各サークルや個人だけではない、ブロックや県でのうたごえの組織的な努力がある。新年早々の創作合宿で、ふくい・北陸祭典成功をリードした「あったかいうた」を生み出した福井、東北における各サークルの創作編曲に果たす小林康浩氏の活躍とそれをつなぐブロックの取り組み、全国創作合宿参加者を中心にオリコンへの組織的な参加をした千葉、一昨年からオリコンがサークルの創作を励ましている東京、トヨタ過労死裁判支援や被爆者集団訴訟、学童保育全国集会など、様々な運動と結びながらすすめた愛知、創作センターづくりを意識しながら数年継続してオリコンを開催し参加を広げている大阪、うたごえ55周年を機に わたしの平和 ムーブメントを起こし「憲法九条五月晴れ」などの歌を生み出してきた京都、憲法ミュージカルを継続発展させている広島、年2

回もの創作合宿を実行する九州、また産別における創作もふくめ、九条を守るたたかいの中で、旺盛な創作活動が各地で展開された。

その運動をつなぎ、励まし、学びあうひとつの起点となったのが、仙台・秋保温泉における全国創作合宿（3月31日～4月2日）であった。地元東北を中心に全国から61人の参加と、多彩で充実した講師によって、学びと交流、そして創作実践のすべての点において大きな成果を上げた。直後に、うたごえ新聞によって伝えられた「ありがとう～大地に咲く花～」原詩作者の渡辺咲地さんのレポートに創作過程とその感動を見ることが出来る。創られた曲がすぐに参加者のホームページ上で紹介され、交流され、広げられたことも今までになかった特徴であった。成功の要因として、地元の宮城のうたごえの協力で、秋保温泉や藁の家など文化的な環境の中ですすめることができたこと、講座の魅力、とりわけ詩人・石黒真知子さんからの示唆に富んだお話は、参加者の創りたい意欲に火をつけ、その後の創作実践が大変活気付いたこと、全国のベテランの創作者がたくさん集まることができ、「オペラ『沖縄』の創造の記録」や、うたごえの創作運動上の未来への展望・課題なども様々な場で語ることができたこと、などがあげられる。

今後も、様々なたたかいとむすびながら各地での意識的な創作運動を広げ、全国創作合宿とオリコンを節目に学びあい、日常的な作品交流をすすめる創作センターを確立していくことが求められている。

方針 2 地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い創造の前進をめざす合唱発表会にする。

〔合唱発表会運動〕

全国の合唱発表会・交流会は29都道府県、9産業別、1階層で開催、1180団体を超す参加団体となっている。栃木で10数年ぶりに11団体で交流会を実現、大阪、宮城、福岡で大前進をしている。しかし、未開催の県もまだ多く、ブロックの連帯も含め計画的な開催を追求していきたい。

協議会加盟団体の枠を越え大きくひろげているところでは、自分たちの思いを発表したい、他の団体から学びたいという要求を大切に、日常の取り組みで結びついた幅広い音楽愛好家にも呼びかけ、地域の音楽団体のネットワークづくりも視野に入れ、実行委員会、懇談会などを丁寧にすすめ、ネーミングも考え、気軽に参加し、交流できる工夫をしている。

全国合唱発表会（オリジナルコンサート含む）は、7部門234団体、のべ4800人の参加で開催された。この間アンケートなどを元に改善を重ねてきた結果、聴き合うマナーも一定の前進、インターネットの活用などで申し込み実務などでも改善が図られている。合唱交流の部は参加団体も増え、創造内容もさらに多彩でゆたかに発展した。スタッフ不足での若干の運営上の支障や、祭典日程とも関連して、聴き合うことを保障できなかった点で課題を残した。

方針 3 地方祭典の全県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

〔2006年日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸〕

日本のうたごえ祭典

祭典は“みんなが輝くあったか祭典”を合い言葉に福井で開かれた。2つのコンサート、大音楽会、合唱発表会とオリジナルコンサートに地元（福井・石川・富山）全国からのべ13800人が参加し、祭典史上初の日本海側開催として、その規模、内容とも成功させた。3県それぞれの特色を生かした舞台構成で、創作曲を中心とした合唱のほか独唱、郷土芸能、太鼓、器楽など歓迎コンサートにふさわしく創り上げたコンサート 越の国から、半世紀を超えるうたごえの蓄積をと福井・全国のうたごえの創造的連帯と地元音楽家・団体、ゲストの演奏で創り上げたコンサート 未来を拓くハーモニー、そして、「つながり」「海は人をつなぐ母のごとし」「かがやき」をテーマに、オープニングからフィナーレまで、未来を拓く子ども達のうたごえを軸に、郷土芸能、いのちの讃歌、国際連帯、歴史の検証、憲法讃歌などがうたや踊り、器楽を通して歌いかわされた 大交流フェスタ・いのちの輝き。日本国憲法公布60周年の日の開催となった祭典は、憲法と教育基本法改悪の動きが一層激しさをます中で、平和憲法をまもり、いのちと暮らしをまもることの大切さをうたごえで大きくアピールした。

祭典成功の要因は、福井のうたごえがこの間積み上げてきた財産（宝もの）を輝かせれば夢は必ず実現することを確信し、それを地道にねばり強く実践したこと。つながりを大切にまわりへ徹底して広げたこと。ステージの歌づくりと練習の積み上げ、一人ひとりが広げ手に、それが演奏の確信になり、観客を広げ、当日の演奏に実らせたことなどがあげられるが、何よりも、実行委員はもちろん、サークル・合唱団一人ひとりが、祭典をつくる主人公として創り上げたことだ。

何よりの財産は祭典総括にある「私達は祭典を受け入れる時に自分達の主体的力量なり地域の特性にこだわり躊躇したが、今祭典を終え振り返るとき、ささやかでも運動の積み上げた歴史とそれを土台に未来を見据えて夢を語りあう仲間がいれば、日本のどの地域でも開催が可能であること。07年奈良祭典、引き続き創立60周年に向けた各県の運動の一助になれば幸いである」に示されている。

〔地方・産業別祭典〕

地方祭典

毎年持ち回りで開催している北海道祭典（岩見沢）九州祭典（鹿児島）は、共に開催地の長を生かし、ブロックの連帯を強め、講習会の開催や全国祭典の取り組みなどにも大きな力となっている。北海道では炭坑や国鉄労働者の生き様を今につなぎ、幼稚園児も一緒に歌う「生活が見える祭典」として北海道のうたごえの広がりを感じさせた。九州は池辺晋一郎氏を招いての「悪魔の飽食」全曲演奏を柱に、活発な創作運動の成果も

反映して九州全県の連帯で成功させた。久しぶりの県祭典となった宮城のうたごえフェスティバル、愛知のうたごえ祭典、奈良のうたごえ祭典（全国祭典プレ企画）は協議会の総力を挙げた取り組みと、ゲストや、ともに歌う合唱団の組織などで外に向かってひろがった取り組みとなっている。広島では05年日本のうたごえ祭典後に一気に増えたうたごえ会やうたごえ喫茶も一堂に会し、これまでの「音楽フェスタ（合唱交流会）」を「祭典」として開催、新たな広がりを見せている。長野（信濃のうたごえ祭典）、山形では毎年開催している。

産業別祭典

保育祭典は、民営化に反対するたたかいを、一人でも多くの人に伝えたいと園をあげての参加もあり、開催地東京のうたごえの協力の中で、父母、労組との共同もあげ、のべ1500人を越える参加者で大きく成功した。開催地東京東部の保育サークルが連帯し、2年間にわたり準備、保育合研などともリンクし、出演者だけでも300人を越える取り組みはおおいに学びたい。

教育基本法改悪の動きが強まる中、教育祭典は新潟・妙高で開催。教育のうたごえサークルはない中で、開催地のうたごえサークルだけを先頭に新潟のうたごえの協力で成功。青年・学生、障害者も共につくる未来に希望のもてる祭典となった。

国鉄祭典は福島・郡山で開催。国鉄郡山うたごえ会を中心に、県協議会の全面協力、国鉄OBなども巻き込んだ取り組みは地元だけで800人を越える参加者を組織。電通祭典は、電通のうたごえサークルのない岡山で県祭典とジョイントで開催、県協議会と創作も一緒に取り組むなどしてたたかいの理解が深まり、これを契機に岡山男性労働者合唱団が生まれている。郵便祭典は広島の青年労働者の参加が何よりの収穫、全国祭典へ送り出すカンパも取り組まれた。医療祭典は、患者会や、健康友の会サークルにも裾野を広げている。港湾、私鉄も参加サークルが少なくなる中でも継続して開催している。自治体は自治労連大阪との共同で開催。

全国青年のうたごえ祭典～f（フォルテ）大きくうたえ～が、3日間のべ500人以上を集めて行われた。これまでの全国交流会の蓄積を元に、初めて「祭典」として開催。楽しみ、学び、表現することを大切に取り組んだ祭典は、多くの大人（ゲスト、講師、スタッフ…ほとんどボランティア）の協力で、うたごえ以外の分野、団体の青年とも共同した取り組みとして成功した。

うたごえ祭典は、今伝えたいことを、誰に向かって、誰と共につくるのかを明確にしながら取り組むことが大切である。県の協議会と産業別のうたごえの共同のとりくみは、双方に貴重な財産を残している。仲間内の交流にとどまらない、「祭典」だからこそできる広がり創造の前進が求められる。

方針 4 歌の広がりをうたごえ新聞読者につなぎ、豊かな「うたごえ発ジャーナル」を確立する

〔うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」〕

うたごえ新聞

06年うたごえ新聞編集は、「世界の羅針盤 憲法九条をまもりいかす文化発信」「新鮮な運動の血液を送る。うたごえ発ジャーナルとして広げる新聞」を基調とした。

憲法関連では、運動方針の柱“SINGING PEACE 999”を豊かに展開するために、年間を通し「I LOVE 9」を特集。各地の実践紹介、音楽九条の会の活動、「弁護士と「第9」コンサート」などを逐次紹介した。全国から実践が寄せられ、数次に渡って特集が組めた。また、「一つの人類へ、日本国憲法の先見性」(井上ひさし)、「世界の宝物、憲法が見えますか」(ジャン・ユンカーマン)、「民主主義の試金石 九条」(高橋哲哉)、「世界の灯台、憲法九条」(森村誠一)、「被爆者の願いは九条脈打つ世界」(土山秀夫)とインタビュー等で識者の発言から、憲法を深める紙面作りを行った。

編集の特徴その2は、“つながり”の特集。“06年日本のうたごえ祭典 in ぶくい・北陸”開催地の運動を伝えるルポ「子どもの未来を拓く詩」を通し、二本松はじめさんらがすすめる“つながりあそび・うた”いのちをまんなかにつながりあう。それは生きる力、その源は平和の運動の広がりや接点を紙面からもつなげた。全労連副議長西川征矢氏はインタビューで「人々が分断される今、つながりを取り戻すうたごえ運動は救世主」と語った。継続し深めるテーマである。

この他、声楽家杉谷恵子さんへのインタビューをはじめ音楽づくりの特集。脱アメリカの変革が進むベネズエラ特集はじめ、バンクーバー、中国、韓国、アフガニスタン、スペインと積極的な通信活動も反映し、世界に視野を広げた。

「読み・作り(通信・企画提案)・広げる(読者拡大)うたごえ新聞」の活動をと開催する“うた新フォーラム”は、福井、京都、兵庫、奈良、東京等で開催。特に全国祭典開催地福井での、祭典成功の土台にうたごえ新聞を置いたフォーラムの開催、企画提案、通信活動、読者拡大がとりくまれ、紙面からも祭典成功の力となった。

また、「読む」活動は、運動創造、紙面作りの上で大きな力となることを重視し、フォーラムの全国展開を強める必要がある。

季刊「日本のうたごえ」

運動を豊かに展開していくために、年間の運動の中心的テーマを深め学び合う編集につとめ、06年度は、05年祭典広島島の教訓、06年ぶくい・北陸のとりくみ、憲法、運動論を特集。「うたごえ運動と憲法」(高橋正志)、「日本国憲法が国歌になる日を夢見て」(坪田康男)、「メディア社会の文化を考える 生身の感動・共有で絆をとりもどす」(有原誠治)、「音楽創造・批評」(小村公次)を紹介した。

運動内からの論文・提言(合唱構『ぞうれっしゃがやってきた』20周年特集他)も積極的に行われた。特に、「創立60周年を迎えるうたごえ運動の創造課題」(守屋博之)は、その後、小林康浩氏から連載執筆で呼応して意見が出され、「うたごえ運動」を深める力になっている。理論学習誌としてこの点をさらに強める必要がある。

方針 5 うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

〔事業・出版活動〕

「SINGING PEACE 999」運動が提起される中、ここ数年の新しい歌も掲載した新版「うた・うた・うた」はカラオケCDとあわせ、時代を切り拓く歌集として出版された。「こんな歌集がほしかった」と歓迎され、予約だけで短期間に1万冊を越え、「字を大きく」などの要望にすぐに対応しながら、1万2500冊が普及されている。「選曲がよい、新曲紹介もありがたい」など、年金者組合、介護センター、書店などからの注文も多い。カラオケCD第2弾と合わせ、60周年に向かう普及運動、「SINGING PEACE 999」運動の大きな力にしていくことが求められている。

「06メーデー歌集」は3万5500冊を普及、前年からわずかながら増えている。三多摩メーデーはうたごえが企画を担当し、「歌って元気なメーデー」として成功し、「歌集」もこの地域では、近年最高の1000冊を越えた。同時に発行した憲法・平和歌集「ねがい」は平和、憲法、教育基本法の集会でうたわれ8000冊を越えた。「ねがい」を筆頭に「あの日の授業」「憲法九条五月晴れ」「ピース・ナイン」などが好評。「ねがい」歌集は今年度もひきつづき広げていく必要がある。

「06祭典歌集・あったかいうた」は祭典企画と合わせ作成され、祭典参加者への普及、練習会などで活用され2250冊普及された。

書籍「ねがい」(三輪純永・著)は短期間に2000冊を普及、感動と共感を広げている。「ねがい」のうたとともにさらに広範な人々への普及が求められている。

この間の日韓音楽交流から実現したキム・ウォンジュン日本公演、チェルノブイリ原発事故被ばくから20年になるナターシャ・グジーコンサートでも多くのCDが普及されている。グジーさんは合唱団の演奏会、県、産別祭典、各地の集会にもゲスト出演し、CD「こころに咲く花」が大好評。

音楽センター出版物は保育、教育、手話なども主力になり盛況の各講習会などでひろがっている。06年日本のうたごえ祭典では、「つながりあそび・うた研究所」関係のメンバーの大きな協力で事業販売でも祭典成功の力となった。

各合唱団、個人の自主出版も活発に行われている。

音楽著作権を尊重した取り組みはひきつづき大切である。

方針 6 演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめ、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる

〔演奏・創造活動〕

全国合唱講習会は、西日本・石川県金沢市155人、東日本・東京都板橋区127人で

行われた。共にふくい・北陸祭典での全国合同曲を講習曲の真ん中において祭典のイメージを膨らませるとともに、西では杓谷恵子氏、東では岩本達明氏を招き、講師推薦曲の合唱も含めて多様な音楽表現、他合唱団の人との交流や協力で作る大合唱の魅力と新鮮さ、可能性、などを学んだ。さらに参加者を増やすこと、事前の準備と祭典曲の練習要素に終わらない合唱の深め方、などが今後の課題となっている。

全国指揮・合唱指導講習会は、長野県松本市あがたの森文化会館で行われた。同会場では21回目を数え、全国18都道府県から72人の参加、声楽講師に杓谷恵子氏、合唱特別講師に里井宏次氏、指揮法特別講師に工藤俊幸氏を迎え、受講者の経験に合わせたコース別指揮法、祭典合同曲を中心とした合唱講座、守屋博之氏による「うたごえ運動の創造活動について」の理論講座、成果発表会等、例年にも増して中身の濃い講習会となった。指揮法講座は合唱団からの積極的な派遣運動で若手の初参加者も多く、二日間に渡るのも効果的である。合唱特別講座は発声法、声の色合い、和声、歌唱法、と多岐に渡る指導で多くを学んだ。指揮法特別講座は歌い手との関係、作品の理解、指揮の基本、などを指揮者の個性に応じて指導され、得るものは大きい。指揮は現場で学ぶ、合唱指揮は常に歌い手とともにあり、新しい挑戦と継続こそが力となる。今後さらに運動理念の学習や、声楽講座のあり方などの検討を進めながら、継続的に受講者の参加と内容を高めていきたい。

2006年日本のうたごえ合唱団が約120人で結成され、北海道のうたごえ祭典 in 岩見沢、日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸祭典 コンサート への出演、名古屋での新春練習会、東京・大阪での練習会、などの活動が展開された。新春練習での松原千振氏（東京混声合唱団指揮者）による合唱指導、浜島康弘氏による講演「うたごえ60周年に向けて思うこと…」なども有意義であり、うたごえ運動の音楽創造の一つを示すと共に、参加団員相互の交流と体験が各地での演奏創造の励みとなり教育的効果も大きい。07年度合唱団の結成も、大阪にて新春練習会が173人の参加で行われて活動が開始されている。

北海道、九州ではブロックとしての合唱講習会が継続してとりくまれ、大阪、東京、静岡、長野などでは協議会の連帯した取り組みとして祭典参加運動や音楽創造で成果を上げている。県・ブロックでの合唱交流会でもうたごえ、学ぶことが位置づけられてきている。その他、新しい音楽家との出会いもつくりながら継続されている関西合唱団の日曜講座、運動づくり、音楽づくりを総合的に学ぶ京都の「学びの会・覚える会」の取り組みにも学ぶところは大きい。また、井上頼豊没後10周年トリビュートコンサートが開かれ、うたごえとしても「トリビュート合唱団」を結成し参加、氏の創造的財産を改めて確認する機会となった。

来年60周年を迎えるうたごえ運動の豊かな経験を受け継ぎ、国内外のすぐれた音楽に学び、創造活動、運動理念の両面での学習教育活動を充実させ、新たなリーダーを生みだしていくことは運動の発展にとって不可欠である。

方針 7 青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、21世紀を担う青年をたくさん迎える

〔青年のうたごえ〕

この間、着実に経験を重ね、盛り上がりを見せてきた青年のうたごえは、一つの成果として「全国青年のうたごえ祭典」を開催、19都道府県から約150人の青年が参加し、分科会、合唱発表会、大音楽会を通して様々な学習と交流を实践した。ふくい・北陸祭典の青年ステージ成功を視野に入れた取り組みは、全国合唱発表会へ3団体を推薦できたことも含め成果を上げた。「全県からの参加」「うたごえ以外の団体の青年との共同」「この間うたごえから離れてしまった青年の掘り起こし」をめざし、積極的な働きかけを行った結果、青年のうたごえがない県からの参加や、多くの団体との新たなつながりが生まれたことは大きな成果であり、さらに発展させていくことは大切になっている。

ふくい・北陸祭典に向けては、早くから開催地福井と連携して取り組み、創作活動でも祭典テーマ曲「あったかいうた」などを生み出した。数年ぶりに現地実行委員会「おでん部」が発足し、積極的な組織活動を展開、祭典本番は福井から70人以上がステージに上がった。「おでん部」はサークルとして継続した活動をめざしている。

広島で行われた原水爆禁止世界大会では、昨年同様、企画段階からかわり、青年の広場パート2「MATSURIだワッショイ」を演出。最後には青年全員で「ピース・サイン」を歌い、踊りかわした。

「引きこもり」「ニート」「ワーキングプア」などの言葉が普段の会話に頻繁に登場するように、青年を取り巻く状況が更に深刻になっている今、「人間らしく、自分の仕事に誇りを持って働きたい」という、青年たちの怒りが各地で起こり、その中でうたごえも響きわたった。中央メーデーでは「青年のステージ」が取り組まれ、労働組合や民主団体の青年にも参加をよびかけた青年の合同合唱が実現した。京都では青年の働く権利を求める「円山青年一揆」のなかで、実行委員会にも積極的に参加しながら、創作曲「あきらめない」が誕生、参加者を大いに励ます一曲となった。

東海青年のうたごえと、東京のにんたま合唱部がそれぞれ初のコンサートを開いた。若者たちが中心の仙台合唱団のアカペラ教室もクリスマスコンサートを開いている。

うたごえ新聞紙上では、記者が取材をする形態の「YOUTH STATION」から、青年たち自身が記事作りをする「ゆうステ」に移行。より積極的に紙面に関わるという点で成果は大きい、「より伝わる記事に」「きれいにまとめようとせず、青年の生の意見を」という感想もあり、今後の課題は少なくない。

恒常的な情報交流としてはまだまだやり切れていない部分も多く、確実に青年が活動しているところへつながれていない弱点がある。青年だけでやろうとせず、また青年に任せきりにもせず、協議会やブロックがささえ、一緒にとりくむ機会を増やしていくことが望まれる。

方針 8 サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やし、合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことを目標持つ

て計画的にすすめる。

〔組織建設〕

広島では、05年日本のうたごえ祭典開催後一気にうたごえ要求が高まり、郵便の職場や新婦人、医療生協の中にうたごえ会が生まれたり、地域のうたごえ喫茶も盛んになった。福井でも、祭典を契機に地域サークルが復活したり、新婦人サークル、青年サークルが生まれている。奈良ではうたごえがこれまで影響の少なかった地域にうたごえ会が生まれ、07年日本のうたごえ祭典奈良開催に向けて意気高い。いずれも、祭典の取り組みの中でうたごえ喜びを実感することから、新たなサークルや定例のうたごえ喫茶に結びついている。

また、祭典や、さまざまな集会で結成された「市民合唱団」や「悪魔の飽食」の取り組みなどから、意識的な働きかけをする中で会員を増やしている例も多い（宮城、埼玉、静岡、奈良など）。合唱団「出版労連鳥の歌」では、九条・教基法を守る宣伝行動に歌で参加する取り組みの中から一気に3人の新団員が生まれている。

青年分野でも新たな動きがある。関西合唱団では定期演奏会に青年独自のステージを企画、そのメンバーがサークル「ブルースカイ」をつくり活動している。山梨では「うたごえ再建」めざし青年中心に4回のうたごえ会がおこなわれている。高齢者合唱団、サークルもますます盛んになっている。

この広がりを、協議会がしっかり把握し、結んでいくことが大切になっている。協議会がニュースを発行し、未加盟の団体にも届け、共同の取り組みを発展させる中で加盟団体も増えている（千葉・東京など）。60周年祭典を準備する東京では、協議会に結集して取り組むことの大切さが強調され、多くの新加盟団体が生まれている。産業別のうたごえの中で、県・全国協議会に加盟していない団体は依然として少なくない。地域と産業別の共同のとりくみを発展させながら、協議会を拡大強化していくことは大切な課題である。

ブロックの連帯の取り組みでは、ブロック祭典を継続して取り組んでいる北海道、九州、交流会を毎年開催している東北、関東、ブロック会議が定例化されている関西、関東などで、情報の交換、全国祭典の取り組み、講習会の開催などで成果をあげている。支え合い励まし合う、共同のとりくみのセンターとしての協議会、ブロックの活動を、各加盟団体の意識も高めながらさらに活発にすることが求められている。

うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」読者拡大

ふくい・北陸祭典実行委員会は、祭典を知らせる絶好のツールとしてのうたごえ新聞と、読者が運動の理解者となり祭典成功の大きな力、祭典後の大きな財産になると位置付け、特別な体制も確立し大きな成果を上げ全国のとりくみを牽引した。昨年度、創刊50周年を記念した総力を挙げた取り組みで1000人以上の純増を達成したうたごえ新聞読者だが、全体としては減少傾向にある。運動の規模と広がりは確実に大きくなり、また、さまざまな運動に文化的要素が求められている今、音楽文化ジャーナルとしてのうたごえ新聞の果たす役割は大きい。「こんな良い新聞があることを知らなかった。すすめてくれてありがとう」という新しい読者の声を確信に、うたごえがひろがる喜びと同じように読者がひろがる喜びを感じる取り組みが大切である。

季刊「日本のうたごえ」読者は会員の約半数にとどまっている。多くの職場、女性サークル・合唱団の購読率は低いのが現状である。運動や音楽づくりについて論議を深め、確信を持った運動を展開のために、この機関誌をさらに充実させながら、多くの会員が購読し、学びながら行動することが60年にわたる運動の成果を未来につなぐ上でも大切になっている。

方針 9 世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる

〔国際交流〕

カナダ・バンクーバーで開かれた世界平和フォーラムに5人のうたごえ代表団を送り、街頭で、パレードで、集会でうたい、語り、核兵器廃絶と憲法九条を世界に発信した。特に「ねがい」のうたが国境を越えて人々をつなぐ様は感動的でもあった。

日本AALAの招聘で来日したベネズエラ代表団を迎えるにあたって、第2の国歌ともいわれる「平原の魂」を全国の歓迎集会で演奏、交流成功の一助になり、アジアの風プロジェクトの新しい成果となった。

8年間の積み重ねの上に立った韓国との民衆の音楽交流は、労音やAALAなどとの共同もひろげながら、さらに熱いものとなった。光州芸術祭に演奏参加、キム・ウォンジュン日本公演を大阪・神戸・広島・埼玉・東京立川の5都市で実現、サム・トゥッ・ソリが来日、赤旗まつりや日本のうたごえ祭典で熱い演奏を聞かせた。なかでもキム・ウォンジュン公演の取り組みは、韓国大使館も後援、在日の人々との共同も広げ、貴重な成果を上げた。

中国・南京では全国紫金草ネットワークの第5次中国公演が11都府県14合唱団、約150人の参加で実現。南京理工大学の学生が中国語で「紫金草物語」を合唱するなど、未来につながる文化交流となった。10月には「ぞうれっしゃがやってきた」の南京公演、そして南京平和鳩合唱団の日本のうたごえ祭典招聘へとつながった。

アフガニスタンの子どもサーカス日本公演の事業に埼玉のうたごえ協議会が共催団体として加わり、音楽センター、センタープロダクションも協力し、成功の力となった。井上頼豊没10年を記念して、カザルスの故郷でうたう「鳥のうた合唱の旅」が6合唱団の有志24人の参加でおこなわれ、地元合唱団との演奏交流も実現した。東京・江戸やっこまつりには、和太鼓サークル「跳鼓舞」と以前から交流のあったアメリカ・アラスカ州から19人の小中学生が来日、「ぶちあわせ太鼓」の日米合同演奏を実現。川崎太鼓仲間響との交流の中でスイスに和太鼓チームが出来、来日して交流。姫路の太鼓集団鯨のオーストラリア公演など民族芸能の分野での国際交流も活発におこなわれた。

方針 10 和太鼓と民謡・民舞のネットワーク化とシステム化の促進する専門家との協力協同、全国講習会の充実、郷土センターの設立、郷土教育者の組織化・メニュー化、

和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

〔郷土のうたと踊り〕

ふくい・北陸祭典全国郷土合同として発表した「響」には、全国から約20人が参加し、八つ杉権現太鼓保存会をはじめとする福井太鼓連盟のリードで合同演奏を成功させることができた。うたごえの全国合同としては、演奏時間が2分足らずの短いこともあって東日本・兵庫での参加に留まったことが今後の課題として残った。

全国講習会は、本年度も西日本では開くことができず、東日本では約200人の参加で盛大に行われた。

地域での郷土のまつりは、上野水上音楽堂で恒例となった「第9回江戸やっこまつり」、川崎での「わくわくコンサート」、西播地域で毎年開催されている「西播和太鼓フェスティバル」、神戸で初めて開かれた「伊藤多喜雄とつくる南中ソーラン&和太鼓まつり」(100人太鼓と300人南中ソーラン)等々多彩な内容で取り組まれている。07年3月には兵庫県和太鼓と民舞のまつり(加古川)が開催予定。

プロ集団との連帯、協同も強化されており、川崎での荒馬座、調布・姫路での田楽座公演成功の大きな役割をうたごえが担っている。また、神戸の太鼓衆団輪田鼓では伊藤多喜雄氏をはじめ狂言役者の茂山千之丞氏らとの共演を成功させている。「ロックソーラン」や「エイサー」は教育現場をはじめ、全国にひろがっている。

東日本では、郷土部員が中心となり実行委員会を立ち上げ、連帯して通年のとりくみを成功させている。この経験を発展させ、うたごえのめざす民族芸能のあり方を深めながら、全国的なネットワークづくり、創造的連帯、専門家との協同、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、郷土センター設立などを視野に入れた取り組みが必要とされている。

2006年日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸 総括

200年日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸実行委員会

はじめに

初の日本海側開催となった「2006年日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸」(以下、ふくい・北陸祭典)は、「I Love Peace I Love Kenpou 9」「うたよ、未来を拓(ひら)く輝(ひかり)となって」のサブタイトルで、日本国憲法公布60周年の11月3日より3日間、福井県内の県立音楽堂ハーモニーホールふくい、サンドーム福井、鯖江市文化センターの各会場に、6部門の合唱発表会とオリジナルコンサート、3つの音楽会に全国と地元(福井・石川・富山)の3県から、のべ13800人が参加し、大きく成功させることができた。

たくさんの方から「感動で涙が出た」「学芸会のようなものに3000円は高いと思っ

たけど、とてもとても、5000円でもよかったねー」「あんなにスケールが大きいとは思わなかった」「こんな福井でも本気になってやればすごいことが出来るんですね。大きな励ましをもらった」などと、うれしい言葉をたくさんいただいた。

ステージに上がった仲間たちからは、「祭典は終わったけど、まだわたし達は終わっていない、来年は全曲歌いたい」と「ぞうれっしゃがやってきた」のステージに参加した子ども達が話している。高齢者のみなさんや女性合同に参加した新しい人も、引き続き歌い続けていきたい、そして来年の奈良での日本のうたごえ祭典に参加したい。青年の1人は「...私はまだゴールテープを切っていません。不思議ですね。既に奈良にいる未来のわたしが見える気がするんです...」と。

被爆・戦後60年の節目の年に広島で開いた、“2005年日本のうたごえ祭典 in ひろしま”は、被爆者を生む悲惨な戦争を二度と起こすまいとの誓いをあらたにした。ふくい・北陸祭典は、その誓いのもとにつくられた日本国憲法公布60周年の日、命と暮らし、平和をまもる誓としての憲法がさらに輝き増すことを願う人々が集まり歌った。

今回、人口80数万の小県での祭典開催は、全国どこの県でも開くことができるという典型をつくった。この祭典総括が今年の奈良での祭典、引き続き創立60周年に向けた各県の運動の一助になれば幸いである。

とりくみの経過

祭典開催を決めるまで 「機会にためらえば失うもの多し」

2003年5月、福井で開かれた西日本合唱講習会の時に始めて祭典開催の打診があった。同年7月に神戸で、奈良、高知、福井の代表が集まって「05年以降の祭典開催懇談会」が開かれた。福井では「絶対無理なんだから引き受けないでー」という声が圧倒的だった。

夢を語ろう！

同年10月と2004年6月の2度、全国協議会高橋正志会長が来福して、日本のうたごえ祭典開催検討会議がもたれた。会長からは、06年に福井で開催するという方向で検討して欲しい、また、もっと夢を語り合おう、と提案があった。討議の中で、今後の福井のうたごえを大きくするためにも絶好のチャンス、開催を進めて行きたい、という意見の一方、こんな小さい福井ではとても無理という意見が出された。討議の中で「やらないか、と言われて、仕方なくやるというのなら成功はおぼつかない。協議会（福井の）会長、副会長にやるという決意はあるのか、その決意があれば方向がはっきりしてくる」という意見が出された。

みんなが心を一つにすれば大きな夢もかなう

04年8月22日、福井のうたごえ協議会臨時総会を開き、06年開催を正式に提案した。討議の中で「今まで私たちは、何かをやるたびに、幾つかの財産を残し、一つひとつ積み重ね、飛躍を作ってきた。福井で開いた国鉄のうたごえ祭典では国鉄福井合唱団『きっぷす』を、保母のうたごえ祭典では、敦賀に保母のうたごえ『まつぼっくり』という財

産を作った。昨年（03年）の『悪魔の飽食』福井公演では『悪魔の飽食福井合唱団』という財産を作り、杓谷恵子先生という専門家とも出会うことができた。小さな福井でも、みんなが心をつにすれば大きな夢もかなう」「今まで北陸全体の交流を通して活動を進めてきた経緯も踏まえて、北陸全体の力を結集した祭典の方向を持ちたい」。このような討議を経て、正式に福井開催を決定した。

とりくみの展開

7月に協議会運営委員、サークル・合唱団代表者で祭典準備会を発足。事務所を開設した。

一人ひとりが輝く、あったか祭典に！

05年9月18日、70人の賛同よびかけ人で、富山、石川県の代表者も含め、9団体32人の参加で、「2006年日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸」実行委員会結成総会を開き、正式に開催を決定した。

企画の基本構想

1、「うたごえは平和の力」「歌はたたかいとともに」の日本のうたごえ50数年の蓄積と地元福井の運動の達成をひきつぎ、平和・憲法・人権を守り、生きる喜びを歌い上げる企画内容とする。

2、地元福井・北陸の特長を生かして企画する。

3、北陸ではじめて開く日本のうたごえ祭典を機に、北陸でこの間培ってきた音楽的到達を一層輝かせ、新たな創造の峰をめざす。

4、各分野・全国各地からの参加を得て全国の合唱団合同演奏、職場、階層の合同演奏を企画する。

5、諸団体・音楽の専門家・各界各層の人たちの連帯協力を得て、我々福井・北陸の仲間が本祭典を主体的に取り組む中で、運動的にも、音楽的にも成長し、福井でのうたごえの新たな発展をめざす。

この企画構想を基に、11月3日～5日の3日間、6000人の大音楽会と2回のコンサート、合唱発表会も含めてのべ12500人規模の祭典とすることを決めた。

愉快にうたごえ新聞を増やそう

みんなで増やせば一干部も夢ではない

この会議では、うたごえ新聞拡大推進責任者の栗田栄さんから、うたごえ新聞読者を増やすことが祭典成功につながる、祭典成功の鍵は（福井の読者）一千人をやりきること、と提案があった。

祭典テーマソング 「あったかい歌」誕生

06年1月29日、東京、兵庫、愛知、京都、奈良から青年のうたごえ有志が来福し、

福井の青年と交流を持ち、愛知の藤村記一郎さんを招いて創作合宿を開いた。この合宿で祭典テーマソング「あったかい歌」が生まれた。この合宿は、全くゼロだった福井の青年のうたごえの旅立ちとなった。

2月11日、全国祭典実行委員会では、これまで検討を重ねてきた基本方針案、企画案が提案されて大筋で承認された。

若葉芽吹く季節、いっせいに各ステージが活動開始

4月29～30日、金沢で155人が参加して西日本合唱講習会が開催された。祭典シミュレーションとして、「そして、一輪の花のほかは…」より「木の実」、女性合同、全国うたごえ合同の練習、つながりステージのダンス、青年のステージなど好評だった。北陸3県からも積極的に参加して、3県の交流も一気に進んだ。

5月に入り、障害者、つながり、青年、ぞうれっしゃ、高齢者、女性合同などの各ステージも実行委員会を結成し、参加呼びかけチラシを作って団員拡大に取り組んだ。ぞうれっしゃ、つながりステージ、「うたのわ500」、女性合同など独自にニュースを発行した。

うたって広げる活動

5月、6月は、県内の各集会、各地の九条の会結成総会で演奏を通し、旺盛に祭典を宣伝した。うたって広げる活動は、国民平和行進や障害者施設でのうたう会の開催、福井センター合唱団、武生センター合唱団は、今までつながりのなかった各地の合唱団やコーラスグループに積極的に出かけて、祭典直前までうたって祭典参加を呼びかける活動を展開した。

涙は出るが歩みは止めないぞ

6月 突然飛び込んできた悲しいニュース。

祭典運営委員長の西江豊成さんが、交通事故で16日未明急逝した。全国からたくさんのお悔やみと励ましのメールや手紙をいただいた。企画委員長の山崎昭彦さんは、「彼はこんなところで躊躇していることを欲していない。目的を完遂してこそ彼を弔われる。葬儀の日ですが『そんな街いいな合唱団』の練習を開きます。彼が夢として語っていたことを一步一步実現するため。それが私たちの彼に対する追悼なのです。運動を突き進む、彼はそれを望んでいます。…涙は出るが、歩みは止めないぞ。見ていてくれ、祭典の成功を。」と決意を語った。

明るく、心ときめかした、うた新フォーラム

7月1日、うたごえ新聞三輪編集長を迎えて参加者100人でうたごえ新聞フォーラムを開催した。

三輪さんは講演の中で、うたごえ祭典が地元の文化を掘り起こし、うたごえを通して人と人をつないで新しい時代を切り開いていくことを実感する、顔と顔を見合わせて互いに心ときめかし、今のこの時代、命、希望が断ち切られない社会を作っていくために今こそうたごえの出番であること、そのつなぎ目にうた新がある、と話し、参加者にうた新拡大

の更なる確信を与えた。

福井市内の全公民館50カ所にポスター張り出しと、チラシを置いてもらうことが出来た。

7月23日、第6回実行委員会を開き、いよいよチケット配布、チケット販売を開始した。

うたごえって？ うたごえ祭典って何？

9月のすべての土曜、日曜日と、また平日も合同練習が組まれた。女性合同の練習は、新しい仲間がどんどん増えて、練習会のつど大きな会場に変更していった。

「ぞうれっしゃ」も8月に作曲家、藤村記一郎さんを迎えての練習を成功させる中で、鯖江地域にも輪が広がり、急速にうたう仲間が広がった。

しかし、チケット普及は目標どおりにはなかなか進まなかった。

「ぞうれっしゃ」の担当者からは、「指導者や伴奏者の謝礼、会場費、楽譜代など、団員からかなりの額の団費を徴収している。その上、さらに『出演するのに自分のチケットも買うの？』という疑問が出ている。うたごえのこと、祭典のことを知ってもらう資料が欲しい」という依頼が事務局にあった。このことは他のステージからも要求が出てきた。新しい仲間たちにも確信を持ってチケット普及をしてもらうために、うたごえ祭典の歴史とうたごえ祭典はみんなで作る音楽会です。財政的にもみんなで支えあう音楽会です。という内容の「各ステージ参加のみなさまへ06うたごえ祭典大音楽会チケット普及のお願い」という文書を発行した。この文書を各ステージの練習会で読み合わせをすることにした。

チケット毎日集約

チケット普及を進めるために9月17日の第7回実行委員会の日から毎日集約を始めることにした。連日、結果を石川、富山にもメールとFAXで知らせた。

10月1日 祭典プレ企画として、「平和のうたごえ奉納 小浜明通寺で『ねがい』を歌おう！」と平和の歌コンサートを開いた。

急速に進んだチケット普及

遅れていたチケット組織を前進させるために、まず運営委員自身が100枚、80枚と高い自主目標を持って取り組むことを確認した。

10月15日、第8回実行委員会では「あなたの一枚が祭典を成功させます。心と心をつなぎます」と、山崎企画委員長が充実した企画内容を報告し、松田毅組織委員長は、どうしても会場一杯の人を迎えたい、そのためにも今日中に1500枚の嶺を越え、その力を確信にさらに次の目標に向かってチケット普及に全力を注ぐことを熱くあつく訴えた。

素晴らしいステージができそうー

押し詰まった10月末の「そして、一輪の花のほかは...」の練習会でも、「ぞうれっしゃ」の練習会でも「よくぞここまで、という思いを強くした」(指揮者の感想)。各ステージも練習が進んで、これは素晴らしいステージが出来る、ここまで一生懸命練習をして

きたのだから、もっと多くの人に聞いて欲しい、見て欲しいという思いが広がった。祭典1週間前の29日、2500枚を突破し、11月4日には3000枚をやり遂げて大音楽会を迎えた。

全国の参加運動

全国では、全国合唱講習会を起点に、県、ブロックでの練習がすすめられた。開催地福井・北陸の取り組みに励まされながら、北海道、九州など講習会の中でまた、地方祭典の準備とあわせて取り組み、東京、愛知、京都、大阪などでは、府県の合同練習をくんで取り組んだ。特に、杓谷恵子さんを招き、東京、京都、大阪での女性を中心とする合同練習は、取り組みに弾みをつけた。

全国からの大音楽会への参加は3000人目標で取り組んだ。歌って参加の地方・分野の意識的な取り組みもすすめられたが、結果としては2200人で目標は達成できなかった。

のべ4800人が合唱発表会本選に参加している中で、祭典参加の活動を年間の運動に位置づけ、各都道府県に祭典プロジェクトをつくり、大音楽会の歌って参加の運動を強める必要がある。

組織宣伝、事業活動と運営

チラシ、ポスター、HP、その他

祭典チラシは仮チラシ8000枚と2回の本チラシ各3万枚、祭典後半になって、手書きでイラスト入りの4枚折チラシ「ほかほかガイド」を1万枚、計7万8千枚を製作した。チラシやポスターの「ほかほかちゃん」のイラストは大変好評だった。手書き「ほかほかガイド」は親しみがあって、祭典の内容を知らせるのに大きな効果があった。

ポスターは500枚製作した。マスコミ関係では記者会見も行なった。その結果、福井新聞、日刊福井・中日新聞が祭典のことを報道した。また、つながりステージ、うたのわ500の練習の様子が報道された。10月に「FM福井」も祭典のことを報道した。

祭典ニュースは実行委員会を開くごとに「雪あかり」を8号発行した。また、事務局ニュース「かたいけのー」を24号発行した。これらのニュースはそのときの課題、到達などを各ステージの団員に知らせ、ステージ作りやチケット普及に大きな役割を果たした。

祭典HPは、今までの祭典ではなかった新しい情報伝達手段として大きな役割を果たした。メーリングは即座にニュースを伝え、互いに情報を共有することができた。特に後半はステージづくりの情報交換に大きな役割を果たした。

うたごえ新聞

うたごえ新聞読者拡大は祭典成功の大きな柱と位置づけ、1000人の目標を持って、期間中に24人で338人に拡大した。自ら拡大推進チーフに申し出てくれた粟田栄さんが100人以上の拡大を進め、拡大推進の機関車となった。また、買い取りも含めた4500部の宣伝紙で、広く大きく読者拡大を進めた。

永平寺の宮崎奕保貫首のメッセージ、同寺の森嶺雄監院のインタビュー、うた新フォー

ラム、国宝明通寺での平和の歌奉納コンサート、同寺の中嶋哲演住職のインタビューなどの記事掲載で祭典を全国発信できた。また記事の内容が地元での拡大に大きくつながった。

運営委員会、事務局体制

事務局体制は1昨年9月の実行委員会結成と同時に事務局長を専従として活動を開始した。運営委員会は月一回をベースに、その時の状況に応じて、臨時、及び拡大運営委員会として16回開いた。6月に西江運営委員長が亡くなった後、直ちに臨時運営委員会を開き、伊藤敬一さんを新運営委員長に、松永朝恵さんを副運営委員長として体制を立て直し、待ったなしの課題に取り組んだ。最少の体制ではあったが、全国協議会の支援もいただき、それぞれが責任を果たし、祭典成功のために力を尽くした。実行委員会は9回開いた。

大音楽会当日の要員体制では、地元要員確保が少ない中、奈良のうたごえ協議会が総力をあげて30人を送ってくれた。

事業・財政活動

祭典財政は、借入・賛同金・チケット・広告・事業収入の5本柱で構成し、祭典取り組みの中でその都度、重点柱を明確にして取り組んだ。

賛同募金（一般賛同金、一口1千円、特別賛同金一口1万円）は3月から本格的に取組み、地元目標2000口を6月、全国目標2000口を7月に超過達成した。祭典成功を左右する大音楽会のチケット普及は、地元目標3000枚を、祭典当日の段階で超過達成した。プログラム広告募集は集中した取組みで目標400（地元200口）を大きく超えた。

事業は出版、物産、祭典グッズ、ビデオ、ツアーなどを取組み、出版では祭典歌集「あったかい歌」「斉藤清巳作品集」を発行。ツアー事業を除く全ての事業で好成績を上げた。特に祭典グッズは好評を博し、祭典の事前宣伝に寄与した。物産展も地元特産の出店が20店舗を超え好評だった。

祭典全体の財政は、大イベントホール・サンドームの舞台設定（仮設舞台）等で予算が大きく膨らんだが、祭典組織の拡大、賛同金、事業活動の奮闘により黒字で納めることができた。

企画総括

祭典を貫く企画の大柱として憲法を置き、子どもを真ん中に障害者・高齢者など、弱者のうたごえを祭典全体が大きく包みこんだ「あったか祭典」をめざした。音楽会の全てに、子どもたちと障害者、そして北陸の地の特徴を表現する郷土などの舞台を実現することで、地方の祭典の特徴を引き出す事とした。

コンサート <越の国から>は歓迎演奏会と位置づけ、地元の合唱団や演奏家・郷土芸能など、福井と北陸のうたごえの特色を生かしたプログラムで構成した。「和太鼓はぐるま」に始まり「そんな街いいな合唱団」につながるオープニングでは、弱い立場の人たちの生きるエネルギーがほとばしり、歓迎にふさわしい熱い演奏を客席に届けることができた。石塚和華ソプラノ独唱は地元作曲家・今川節（せつ）作品をとりあげ、マリimba合奏では

小学生から大人まで幅広いメンバーが華やかで楽しい演奏を披露した。石川のうたごえ「野田淳子と歌う合唱団」の演奏。日本のうたごえ合唱団は水準の高い演奏を聞かせた。斉藤清巳作品をうたう「想いの風合唱団」でコンサートを締めくくった。最後には会場一体となって「未来をかけて」をうたい交わした。“これこそうたごえ祭典”と感じるほど会場全体がひとつになり、まさに「あったか祭典」の名にふさわしい幕開けとなった。

コンサート <未来を拓くハーモニー>は最終日に開催した。パイプオルガンの演奏について、福井ともつなりの深い池辺晋一郎氏の指揮で「新世界」、混声合唱組曲「悪魔の飽食」より3曲を演奏した。日中友好こどもたちの合同演奏、マリンバと並んで国内有数の生産地であるハープの演奏と続いた。ナターシャ・グジーさんは透明な声でウクライナの民謡を歌った。「全国男声合唱団」は会場を圧倒した。

コンサートの、そして今年の祭典の締めくくりは「そして、一輪の花のほかは…」で飾った。憲法第九条が危機にさらされている今こそうたうべき作品だと、福井のうたごえの演奏力量を総結集してとりくんだ。中でも、第2章「そして、一輪の花のほかは…」は難曲を練習の積み上げで克服して演奏に臨んだ。作品の内容をより深く伝えるためにステージ上部に大型のスクリーンを配し、原作の絵本を映し出した。指揮者の守屋博之氏からは「この作品に取りくむ決定をした実行委員会の鋭い目はすばらしい。演奏の中核としての役割を果たそうとしている福井のうたごえの仲間たちに心からの敬意を表する」とエールをいただいた。

【大音楽会「うたよ。未来を拓く輝（ひかり）となって」】

2日目の大音楽会はサンドーム福井で総参加者6000人で開かれた。会場前には開場を待つ長蛇の列が出来た。

第1部<つながり>

オープニング、北陸3県の大人と子ども530人の「Open your eyes! ~さあ、目を上げて~」で開幕。そして、つながりのステージでは全国も含めて750人の大きな花が咲いた。中山譲さんは「サマー・カレッジなどの15年間の軌跡でもあるんだよね。みんなの努力が、まさに実った瞬間でしたね。長い道のりも20分で終るけど、その道を歩いてきたからこそ到達したんだよね。…」と感想を残している。ステージ狭しとうたい踊るその姿に観客は圧倒された。

「福井で生まれた太鼓を全国の仲間に聞いてもらいたい」という担当者の思いが結実して、福井の太鼓「響」が実現した。今祭典を機に出会った太鼓集団だが、成功のために大きな力を発揮していただいた。また、「うたえばいつでも青春」合唱団と名付けた高齢者のうたごえには300人が、全国労働者合同には国労北陸地本が全面的に支援をし、名古屋で職場のうたごえ代表者会議を開いて組織を広め、400人が出演してそれぞれの思いをうたい上げた。

第2部<海は人をつなぐ母の如し>

100年前の実話、「韓国船難破救助のはなし」はオカリナと朗読で構成し第2部を開

始。ゲストの“サム・トゥッ・ソリ”、ネットワーク6年間の積み重ねで中味を深めた全国紫金草合唱団、10月の「ぞうれっしゃ南京公演」がきっかけで来日した南京和平鴿芸術団と、日本海を取りまく民族の交流と平和をうたい交わした。

全国女性のうたごえ「希望の灯」合唱団は620人が出演。指揮者・杓谷恵子さんの魅力的な指導で、うたごえの枠を超えた新しい参加者も目立った。杓谷氏は県外へも積極的に指導に出かけた。全国うたごえ合同では、地元の高校生も「ねがい」をうたい広がりをつくった。

第3部<かがやき>

障害者のうたごえ「うたのわ500」、青年のうたごえ、ぞうれっしゃ合同と伴奏を引き受けた武生東高校の吹奏楽部に絶賛の声が集まった。「今の教育を取り巻く重い雰囲気」を笑い飛ばすようなエネルギーを感じた」など多くの感想が寄せられている。

障害者のうたごえは「ハスの実コンサート」を母体に展開した。障害者にとっても今の社会環境は悪化の一方である。「障害者も生きる権利を持つ主権者として闘うとき。そんな主張をうたいたい」(指揮者・具谷裕司)と300人でステージに立った。青年のうたごえは創作曲「笑顔日和」をうたい、「ビリーブ」では「うたのわ500」と連帯した。青年の一人は「指揮に合わせてひとつになった時、とても不思議な感覚になり、皆一人ひとり違うのに、気持ちの向かう方向は同じなんだなあ、と胸が熱くなった」と感想を残した。

「ぞうれっしゃ」は過去に福井のうたごえでは取りくんでいないが、担当者の情熱と地域のつながりを目一杯に活かしたチームワークで600人のステージが実現できた。工夫を重ねたステージを創りあげ、未来にはばたくこの子どもたちのうたごえで大音楽会を締めくくった。

子どもから高校生、さらには若いお母さん、青年と、若いエネルギーがあふれて未来を展望できる大音楽会となった。

3つの音楽会とも会場を一杯にして音楽面でも大きく成功をおさめた。成功の要因は、第一に、全てのステージにおける「地道な練習の積み重ね」と、その結果産み出された「多くの人達とのつながり」という財産だといえる。各ステージで地元の担当者を配置し、地域を考慮し複数の運営体制をつくり、ニュースも随時発行した。新しい歌手を集めるために、3～4月に指導者・伴奏者も決め、今まで培ってきた北陸の連帯を活かしながら、苦労しながら練習に組織に取り組んだ。それぞれのステージでは、練習会場は1カ所にとどまらず、北陸の各地で展開した。

「つながり」の45回を筆頭に「女性合同」27回など、各ステージで10回から20数回の練習を重ねた。この徹底した粘りが成功の基礎となっている。1回1回の練習の成功は演奏の確信になり、新たな参加者を呼び、参加者は「うたごえのうた」に共感もして、最終盤チケット組織の飛躍的な伸びにつながった。さらに、この地元の奮闘が全国からの熱い連帯を生んだ。

第二に、企画そのものに今まで北陸の地で培ってきた運動の実りを活かしたことがある。日常の活動により生まれた音楽専門家をはじめ、いろいろな人達とのつながりが、

しっかりと花咲いた祭典といえる。杓谷恵子さんというバイタリティーあふれる指導者を得たことは、いろいろなステージが大きく展開していくのに欠かせない要素となった。合唱指導だけでなく、マリンバ、ハーブなど演奏者を引き合わせてくださり、高校生の組織に奔走していただいた。自身が指導される婦人コーラスなどからも多くの参加者を誘ってくださった。また、地域の市民音楽祭における地道な活動で親しくつながりを育んできたことが武生東高校吹奏楽部の出演につながった。

祭典のメインステージとして見事に花開いたつながりのステージには、サマーカレッジ実行委員会という福井県内全域に組織され積み重ねられた運動があった。また今回新たなつながりを得た分野もあり、これからの北陸の地におけるうたごえの発展が、より大きな規模で進展していくことを保証しているといえる。富山県高岡地域で過去20年間に渡って、子ども、教師、父母たちが一緒になって開いてきた「大空へ飛べ」コンサート、石川のお母さんたちが中心にすすめる「あしたのきみに」コンサートのみなさんとのつながりも祭典成功の大きな力となった。

第三に、舞台スタッフの尽力で、スムーズな舞台進行を確保した。インターネットを駆使した事前の綿密な打ち合わせによって、多人数を大きな混乱もなく移動させることができた。それでも終演時間は延びた。どんなに長くても3時間に収めることは非常に大切である。そのためには早い段階から企画内容をより吟味する必要がある。この企画段階でのステージの絞込みとメリハリの利いた時間配分が、地域色をより際立たせる大切なポイントとなる。

おわりに

あるブログに次のような書き込みがあった。

「お友達が出演するというので行って来ました。行ってびっくり、あの広い会場が一杯なのです。ステージを見て再度びっくり、なんて大人数！ ステージに100人単位で数えられるほどの人が登場するのです。会場の観客＝出演者といった勢いで一体感がありました。もう一つ驚いたことは、メッセージ色が強いこと。命、反戦、平和、憲法九条、教育基本法、障害者福祉、南京問題や韓国とのいきさつ、戦争など鮮明な色合い。でもこれって、県や教育委員会も後援しているんだよね。まっすぐでひたむきな出演者たち。こんな心が世の中に溢れたら、きっと誠実で明るい未来が開けるだろうな。私は社会的な視点で物事をみつめだしたら、理不尽なことばかりで憤死しそう、こういう活動に背を向けている卑怯なノンポリで、その場にいるのがやましい気がしました。...そういうものが多いから世の中が変わらないんだろうな。自分のあり方の再考を促すステージでした」

私達は祭典を受け入れる時に自分達の主体的力量なり地域の特性にこだわり躊躇したが、今祭典を終え振り返るとき、ささやかでも運動の積み上げた歴史とそれを土台に未来を見据えて夢を語りあう仲間がいれば、日本のどの地域でも開催が可能であることを実感した。命や暮らし平和への願いはどこでも共通であり、なによりも日本のうたごえ全国協議会という運動の母体と半世紀を越えた祭典の歴史の積み上げ、到達点があるからである。

私達はこの祭典を取り組むにあたって、三県のそれぞれの実勢を認めつつ、北陸全体に大きく飛躍するうたごえ運動体をどう構築するかについて語り合った。すべてが手探り状

況の中での出発であったが、北陸三県のうたごえ、全国のうたごえの連帯で大きく成功し、祭典史上新たな歴史の一ページを築いたものと確信する。

私達は祭典運営委員長として全体を指揮したかけがえのない友人、西江豊成氏を不慮の交通事故で失った。祭典の成功は生前の氏の功績によるものが大きい。ここに感謝の意をささげ、ご冥福をお祈りする。

憲法9条を生かし、いのち輝く地球(くに)を
うたごえ創立60周年に向かう活動計画と07年度活動方針 活 動 方 針

・うたごえ60周年に向かう活動計画

1 普及、創作と演奏・創造の旺盛な展開

全市区町村、わが町・わが暮らしに、世界の羅針盤、平和憲法・九条をまもるうたごえを響かせる。

「SINGING PEACE 999(スリーナイン)」行動の全市区町村の展開と新版「うた・うた・うた~always」(目標99900部)をあらゆる機会に広げる。

“みんなで創り歌う。”創作活動、演奏・創造を豊かに発展させる。

SINGING PEACE 999(S.P.999)大普及運動

「憲法・平和の歌、働くものの歌、いのちの歌等...全国の創作運動、創作合宿の発展の中で大衆歌曲、合唱曲を創り、60周年祭典に大集合」の方針の具体化をすすめる。

うたごえ創作活動家はもちろん、専門家の協力も得て、60周年を記念する大衆歌曲、合唱曲を創り、60周年創作プロジェクトで、プロデュース、作品化し、運動化する。

2 専門家との協力・協同の作品づくりと作品演奏

60周年を記念する作品を委嘱または、各地で創られる作品の中から記念作品として位置づけ取り組む。

60周年を記念して~うたは歴史(とき)を刻む~「うたごえと日本の作曲家たち」コンサートの開催。

3 合唱発表会運動を活発に

うたごえ祭典と合わせ、演奏交流の場であり、うたごえを広く大きく進めていく力となる合唱発表会運動を活発にし、60周年までに合唱発表会の全都道府県開催と1300の

参加団体に

60周年祭典時の合唱発表会は、合唱祭的な多様・多彩な内容で開催する。

4 日本のうたごえ祭典

うたごえの広がりを各地のうたう会、コンサート、うたごえ祭典等に実らせ、07年奈良、08年60周年日本のうたごえ祭典・東京を成功させる。

09年以降の祭典計画を祭典プロジェクトで検討、案をもつ。

5 “うたごえ発ジャーナル”の役割を一層輝かせ、史上最高の読者を

今、生きる人々の願い・思いを歌にしてつなげるうたごえ運動の魅力を伝える“うたごえ発ジャーナル”の役割を一層輝かせ、豊かな紙面作り、読み・広げる活動を、うた新フォーラム全県開催と合わせ進め、史上最高の読者を迎える。

季刊「日本のうたごえ」の位置づけを高め、加盟員全員購読を積極的にすすめる

60周年記念の“うたごえ新聞フォーラム60”と題してのフォーラムを「ときめきインタビュー」に登場した人を中心に政令都市では開催する。

6 出版事業・普及活動を活発に

歌集・新版「うた・うた・うた～always」の大普及

創造・運動理論の出版と普及

うたの背景、解説のハンドブック（CD10枚組の解説と新しく加えて）

「創造と展望」、季刊「日本のうたごえ」での理論特集等を抜粋したパンフ、冊子の作成。

シンポジウムの開催（地方開催も）と出版

7 演奏・創造と教育活動の発展

演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめ、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる。

8 組織建設

全市区町村にサークル・合唱団をつくり、加盟を500団体に、協議会づくりと強化を

各都道府県で08年（09年総会まで）までの具体的目標をもつ。

9 郷土のうたと踊り

60周年に向け、「郷土のうたと踊り」のフェスティバル（音楽会）を太鼓、踊り、民謡、合唱等多彩な内容での開催を検討する。

10 国際交流

アジア、世界への視点で60周年に向かう国際交流の輪を広げる。

・07年活動方針

方針 1 人々のねがいと結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、「共に生きる町づくり・地域づくり」のうたごえを広げる。

“いつでもどこでもうたごえを”を合言葉に一人・合唱・器楽・和太鼓と民謡・民舞...多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びをひろげる。

イ、「SINGING PEACE999」行動を、すべての合唱発表会参加団体がとりくむことをめざす。新版「うた・うた・うた~always」をあらゆる機会に広げる。（07年目標 39990部）

ロ、サークル・合唱団、うたごえ協議会で「うたごえ九条の会」をつくり、幅広い専門家、音楽愛好家とともに「音楽・九条の会」をつくり、広げ、地域、分野の「九条の会」との連携を深めた創意的活動を展開する。

ハ、すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、60周年までに全市区町村での「みんなうたう会」を計画を持って実践する。

ニ、人間らしく生き、働くために、地域・職場からのうたごえを共に起こす。

多くの人が“こぞってうたえる”愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

イ、歌を創り生まれた作品を歌い、“みんなでつくり歌う運動”をひろげる

ロ、「日本のうたごえ創作センター」の機能を充実させ、創作活動家を生み出し、創作活動と作品交流を発展させる。

ハ、2月23日～2月25日開催の全国創作合宿を内容・参加運動とも成功させ、憲法守り生かす歌づくりと60周年を記念する大衆歌曲、合唱曲を創る力にする。

歌う喜びを出発点に、いのちや音楽の輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を発展させる。

方針 2 地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い創造の前進をめざす合唱発表会にする。

合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせ、さらに改善を進める。

新しいところに積極的に呼びかけるとともに、開催の仕方、運営を工夫し、フェスティバル的内容を盛り込むなど豊かな交流ができる合唱発表会をつくる。

合唱発表会参加団体今年度70団体増の目標を持ち、未開催県の今年度開催計画を持つ。

方針 3 地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

うたごえを起こし、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、祭典運動の新たな前進をめざす。

「2007年日本のうたごえ祭典 in 奈良」を全国の連帯で成功させ、08年、うたごえ60周年祭典・東京を準備する

09年以降の祭典計画を祭典プロジェクトで検討、案をもつ。

方針 4 歌の広がりをうたごえ新聞読者につなぎ、豊かな「うたごえ発ジャーナル」を確立する。

読んで魅力を伝え、結びつきを広げ、読者になってもらう～読み、つくり、広げる～を合い言葉に紙面の中からたくさんの運動の財産を学び、創造、組織の力にする。うた新フォーラムを各地で計画的にすすめる

うたごえ新聞読者を05年到達を直ぐ回復し、新読者を1000人増やし、60周年に最高時読者を迎える展望をち、季刊「日本のうたごえ」新読者を150人増やす。

方針 5 うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

すべての協議会加盟団体に事業部担当を置き、事業普及活動を活発にすすめる。新版「うた・うた・うた」、「07メーデー歌集」、「07祭典歌集」などを活用し旺盛な普及活動をすすめる。

方針 6 演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめる、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる。

それぞれの合唱団、サークルでの教育を日常の練習や実践の中で行うことを重視するとともに系統的に各種講習会への参加を強める。経験あるリーダーにつづく、中堅、若手リーダーが力を発揮し育っていけるように協議会でも計画的にすすめる。演奏・創造活動を豊かに発展させ交流し、批評活動や運動の理論活動をすすめる、力にしていく。

サークル・合唱団の参加を強め、全国講習会を成功させる。

教育・学習運動を活発にし、21世紀の運動を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

日本のうたごえ祭典参加の企画に合わせた全国祭典合唱団、日本のうたごえ合唱団の参加を強め、日本のうたごえの創造的前進をめざす。

合唱指導者懇談会の開催（全国指揮・合唱指導講習会時）、指揮者教育者会議（グル

ープ)の結成、指揮者連絡会等、教育システムの組織化をすすめる。

方針 7 青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、21世紀を担う青年をたくさん迎える。

青年の要求に敏感に目を向け、仲間づくり、サークルづくりと団体・分野を超えたネットワークづくりを強める

「運動する力」「音楽する力」をつける「学びの場」を系統的につくる

青年学生部を充実させ、全国を視野に入れた青年のうたごえの連帯を強める

第2回全国青年のうたごえ音楽祭 in きょうと「響感」を成功させる。

方針 8 サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やし、合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことを目標持って計画的にすすめる。

合唱発表会参加団体を70団体増やし、都道府県うたごえ協議会の確立目標を持ち、新加盟団体を50団体増やす。

方針 9 郷土の歌とおどりをを活発にし、専門家との協力協同、全国講習会の充実、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

方針 10 世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる

アジア、世界への視点で60周年に向かう国際交流の輪を広げる。

07年光州芸術祭参加・米軍基地反対闘争交流ツアー（アジアの風プロジェクトとの取り組みとして）、「悪魔の飽食」ヨーロッパ公演、南京大虐殺70年「紫金草物語」第6次中国公演を成功させ、60周年めざすアジア、ラテンアメリカ、世界への交流の輪を広げる。

おわりに

わたしたちは“輝け憲法九条！ うたごえは未来を拓く”と平和のうたごえをつくり、広げ、歌・音楽の感動で、人々の心をつなぐうたごえを響かせてきた。

憲法を「改悪」し、国民の暮らし、自由を奪い戦争をする国になるのか、憲法を生かし、いのち輝く国にするのか、一斉地方選挙、参議院選挙の年でもある今年は、まさにその選択が国民一人ひとりに問われている。

いま、うたごえ運動への新たな期待が高まるなか、音楽・文化を通して一人ひとりの心に憲法の魅力を届ける「SINGING PEACE 999」行動を全国津々浦々でおこし、地域、職場に命かがやかせるうたごえを圧倒的多数の人々に広げたい。

2007年主な年間活動

日本のうたごえ祭典奈良

11月23日(金)～25日(日)

地方・産業別合唱発表会

計画的に早めに準備する。

合唱発表会は10月21日までに終了

産業別・階層別うたごえ祭典・交流会

港湾(東京予定)

教育(8/4～5 神奈川・小田原)

郵便(9月京都)

医療(9/8～9 千葉)

国鉄(10月神奈川)

保育(10/27～28 広島)

自治体(未定)

電通(9/22～23 東京・三多摩)

私鉄(9/17 大阪)

青年(8/25～26 京都)

東北交流会(6/30～7/1 山形)

関東・東京交流会(5/26～27 群馬)

全国講習会

第6回全国創作合宿

2/23～25 千葉

西日本合唱講習会

5/4～5 奈良

東日本合唱講習会

5/12～13 東京

西日本郷土講習会(未定)

東日本郷土講習会

4/29～30 神奈川

全国合唱指導・指揮講習会

6/15～17 松本

3・1ビキニデー

2/27～3/1 静岡

原水爆禁止世界大会

8 / 3 ~ 6 広島 8 / 7 ~ 9 長崎

第53回日本母親大会

8 / 25 ~ 26 東京・埼玉

日本高齢者大会 9 / 17 ~ 18 横浜

08年日本平和大会

11 / 23 ~ 25 沖縄